

# Morley と Dickens、そして Forster

山崎 勉

## 論文の要旨

Henry Morley は 1851 年に *All the Year Round* 誌の前身 *Household Words* 誌の正式なスタッフとして迎え入れられ、その後 *All the Year Round* 誌の編集スタッフに横滑りし、1865 年に London の University College に教授職を得るとともに *All the Year Round* 誌との正式なスタッフとしての関係を終えた人物である。彼は 1860 年から 1867 年迄 *Examiner* 紙の編集長としても活躍している。本稿の目的は、Morley が Charles Dickens と John Forster のそれぞれに向けた視線を比較・検討すること、そしてそこから浮かび上がって来る Morley 自身の像を検証することである。

編集者そして作家としての Dickens に向けられた Morley の視線は、編集者としての Forster に向けられた視線に比して相対的に厳しいものであり、その厳しさは最後まで完全に消滅することはなかった。しかし Morley の人生はその行路の途中で Dickens との出会いがなければ、随分とその様相を異にしていたことであろう。それに Morley の才能は確かに Forster の指導によってその活動の領域を広げると同時に開花したのであるが、*Household Words* 誌と *All the Year Round* 誌へ頻りに寄稿する裡に鍛錬され、その両誌の編集者としての仕事をこなす裡に培ったジャーナリストとしての技術も、その才能の開花というものに寄与するところ大であった。

(序)

筆者は以前 Charles Dickens が 1864 年 3 月 21 日付の書簡で、John Forster の上梓した *Sir John Eliot: A Biography, 1590(sic)-1632* (2 巻本) を自分の主宰する *All the Year Round* 誌上で書評するよう、同誌のスタッフの一人 Henry Morley に依頼した件に触れたことがある。Morley は依頼通り同年 4 月 23 日付の *All the Year Round* 誌上にその書評を掲載した。当時 Dickens は *Our Mutual Friend* を執筆中であり、Forster を揶揄すべく登場させた自己満足と横柄さの権化 John Podsnap 像の制作を既に開始していた。その書評執筆の依頼の背後には Podsnap 像に我が姿を見出した時の、Forster の怒りを事前に和らげておこうという Dickens の意図が隠されていたのである (『こころ』 208-11)。

こうして Dickens と Forster との仲を取り持つ役割を担った Morley は、1851 年に *All the Year Round* 誌の前身 *Household Words* 誌の正式なスタッフとして迎え入れられ、その後 *All the Year Round* 誌の編集スタッフに横滑りし、1865 年に London の University College に教授職を得るとともに *All the Year Round* 誌との正式なスタッフとしての関係を終えた。もっとも彼は 1868 年に数ヶ月間、*All the Year Round* 誌の副編集長 W. H. Wills の代わりに臨時に編集の仕事をしている。また彼は 1856 年には *Examiner* 紙の文芸欄の編集者ともなり、1860 年には同紙の唯一の編集者となっている (Solly 193, 226, 244, 251; *Letters* 6: 79n; Oppenlander 45)。本稿の目的は、Morley が Dickens と Forster のそれぞれに向けた視線を比較・検討すること、そしてそこから浮かび上がって来る Morley 自身の像を検証することである。

本論に進む前に上述の書評の依頼がされた頃の Dickens と Forster との関係、この二人との出会いに到る前の Morley の略歴、そして彼等の接触の第一段階での有り様を一瞥しておこう。先ず件の書評依頼の頃の Dickens と Forster の関係を見てみよう。件の書評が Podsnap 像のモデルが自分であることを知った時の、Forster の怒りを和らげる目的で依頼されたことが示唆するように、Dickens と Forster の関係は当時かなり複雑なものとなっていた。と言うのは、Dickens が近親者（例えば父 John）を非難する目的で作中人物のモデルとしたことを良しとしない Forster が、Dickens の自己弁明としての父親の自堕落さに端を発した少年時代の苦い体験の告知等に納得しなかったため、Dickens が反発して人物創造（例えば *David Copperfield* の Steerforth や Dick）を通じての Forster いじめを始めてしまったのである。それでも実力を互いに認め合っていた二人の関係は、双方にとって利するところ大であったために完全に断たれるということにはなかった。<sup>1</sup>

次に Dickens や Forster との出会いに到る迄の Morley の略歴を記しておこう。Morley は Dickens と Forster よりおよそ 10 年遅れて、1822 年 9 月 15 日に外科医だった父 Henry Morley, Sr. と母 Ann の間に次男として誕生。母親は Morley が 2 歳になるかならない位の時に他界している。Morley が受けた教育は Stony Stratford での 6 歳ないし 7 歳からの教育に始まり、ドイツの Neuwied on the Rhine の学校での 1833 年から 1835 年迄の教育、および 13 歳近くになって帰国した後、父の職業を継ぐことを念頭に入れた 教育を開始するための Stockwell の Proprietary School での教育、16 歳で移籍した King's College での 21 歳迄の教育（1838 年から 1843 年迄医学を学ぶ）といったものである。1839 年には University of London での受講も許され地質学と植物学の講義を受けている。1843 年から 1848 年迄外科医の助手そして外科の開業医として働き、1849 年から教職に転向して Manchester や Liscard で学校経営をする。彼の学校設立趣意書で提供されている学科目は、商業関係の諸科目、フランス語、ドイツ語、古代古典学、英語の構造、英文学、英作文、自然哲学、自然科学といったものである。この他に特記すべきは、King's College 在学の頃から Morley が真に関心を抱いていたのが悲劇、小説、詩、そして随筆であったことだ。<sup>2</sup>

さて Morley と Dickens の接触は、*David Copperfield* の Steerforth 像を利用して Dickens が Forster いじめをしていた 1850 年 4 月初旬に、Dickens が書簡（4 日[推定]付）で Morley に *Household Words* 誌への衛生問題に関する寄稿を求めたことを嚆矢とする。その書簡は *Examiner* 紙の編集者であった Forster からの 4 月 5 日付の Morley 宛の書簡に同封されていたものである（Solly 149; *Letters* 6: 79）。このことから分かるように Morley は Dickens との接触の前に既に Forster と接触していた。その発端は 1849 年に London でコレラが流行したことをきっかけとして、Morley が *Journal of Public Health and Monthly Record of Sanitary Improvement* 誌に寄稿した、“How to Make Home Unhealthy” と銘打ったシリーズの記事のいくつかが *Examiner* 紙に転載された後、*Journal of Public Health* 誌の廃刊決定を知った Morley が 1850 年 3 月 25 日付の書簡で、自分が執筆した記事を直接 *Examiner* 紙に掲載してくれないかと Forster に求めたことである。Morley の力を前から認めていた Forster は早速翌 日付の Morley 宛の書簡で、編集者として Morley の要求を大歓迎する旨 を伝えた。その結果、同年 3 月 30 日発行の *Examiner* 紙の社説として Morley の記事が掲載されたのである（Solly 145-48）。翌月の 4 月 4 日（推定）付の Morley 宛の Dickens の書簡は、Forster から Morley の噂を聞いた Dickens が *Household Words* 誌を Morley の助力でより充実したものにしよう と願って送ったものなのだ。*Household Words* 誌は直前の 3 月 30 日号でスタートしたばかりであった。

(2)

このようにして出会った Dickens の編集者としての能力への Morley の評価を検証してみよう。

手始めに *Household Words* 誌の第一号への彼の評価を見ることにする。Morley はその号に掲載された Dickens 作と思しき “Valentine’s Day at the Post-Office” (*Household Words* 1: 6-12 [実は W. H. Wills との合作]) は気に入ったが、同号に掲載された他の執筆者による (と M が判断した) ものはつまらないと感じている。つまり Morley は編集者としての Dickens の力量の試金石となる、*Household Words* 誌の内容に対しては否定的な評価をしたのだ。Morley はその頃のある書簡で、Dickens は「洗練された鑑識眼」(“critical refinement”) や「しっかりとした文学的なセンス」(“a sound literary taste”) を持ち合わせていないので、文学雑誌の編集者としては適材ではないと結論付けている (Solly 149)。

Morley の *Household Words* 誌への寄稿に到る過程を振り返ると、彼のその雑誌への評価がさらに確認出来る。彼は上述した理由で初めその雑誌への寄稿を逡巡するのだが、結局 Dickens との知己を得られることや、*Household Words* 誌を健康問題に関する自分の意見を開陳する *Examiner* 紙に次ぐ第二の場とすることが出来る、といった理由で Dickens の申し出を承諾している。Morley は早速 “Wild Sports in the City” と “The Great Unwashed” という 2 編の論説を執筆するのだが、余りにも個人的な諷刺の色合いが濃すぎるため *Household Words* 誌には向かないという理由等で自ら没にし、寄稿を依頼されなければ良かったと不平をこぼした。つまり *Household Words* 誌の購読者は「判断力に欠ける大衆」(“undiscriminating mass”) であるため、自分には本領を発揮出来るような「自然な筆致」(“naturally”) で論説を執筆出来ないというのが彼の考えであった。彼は苦労した末に *Household Words* 誌の 1850 年 5 月 18 日号に掲載されることになる、ゴシップ好きで自惚れが強い偏見だらけの老婦人を中心に据えた、黄リンマッチ工場の抱える健康問題と London における水質汚染問題を扱ったやや滑稽な物語風の記事 (“Letter from a Highly Respectable Old Lady”) を完成させている。さらにその後、彼が以前に書き溜めておいた童話の一つである “My Wonderful Adventures in Skitzland” が同年 6 月 1 日号に採用されると、彼のところへ *Household Words* 誌からの記事執筆の催促状が次から次へと舞い込むことになる。<sup>3</sup>

Morley は催促されて送ったものが修正された時には例外はあるものの、<sup>4</sup> 身近な者達に *Household Words* 誌の編集方針について随分と不平を漏らしたようだ。例えば “A Penny Saved; A Blue-Book Catechism” (*Household Words* 誌の第 30 号[1850 年 10 月 12 日発行]に掲載) という記事の原稿が内容変更の要求とともに返却された時、Morley は「練達され、洗練された理性」(“a trained and cultivated reason”) に欠ける Dickens の意見には承服出来ないと考えているし (Solly 163)、1851 年 6 月に *Household Words* 誌の正式なスタッフとして迎え入れられてからでも、“The Good Side of Combination” (同年 10 月 11 日号で掲載) の原稿を Dickens に修正するよう求められた時には、ある書簡で語気鋭く次のように言っている。

Dickens, *bother him!* wants the combination paper altered from a cheerful dialogue to a grave essay. I thought the subject better treated in the other way, and think so still. . . . (Solly 196 Emphasis added)

*Household Words* 誌の唯一の大学出のスタッフとしてのプライドのなせる業という訳でもないだろうが、「うるさい奴だ」(“bother him!”) という Morley の Dickens に対する本音には実に興味深いものがある。

*Household Words* 誌のスタッフとなった頃には 550 ポンドもの借金を抱え (Solly 186)、婚約者 Miss Mary Anne Sayer に結婚を待たせていた Morley は、<sup>5</sup> *Household Words* 誌の事務所 (つまり Dickens) から相当に良い報酬を得ることが出来たことも一因となって (Solly 153, 154, et passim)、<sup>6</sup>



との対立を扱う記事の中で、*Examiner* 紙（つまり Morley）が前者の肩を持ったのである。このことを知った Forster が二通の書簡で Morley に自分の意見を率直に伝え、どうやら Morley は編集長としての自分の自主的な判断を主張したようである。すると Forster は 2, 3 日後には意見の違いがあったことなど忘れて、以前同様の親しみを込めた調子の別件についての書簡を Morley に送ったのだ (Solly 244-45)。この出来事を記述する Solly は二人の友情の如何に重きを置いているが、筆者には Forster が自説を主張する Morley に自分が教授した編集者としてのあるべき姿を見出し、負うた子に教えられる思いでその別件についての書簡を送ったように思われる。このエピソードは結局 Forster の編集者気質の何たるかを示す恰好のものであり、弟子の Morley は師匠 Forster のこのような姿に改めて深い感銘を受けたのではないだろうか。Fred Kaplan は Morley が *Household Words* 誌の「ディケンズ崇拜の[メンバー]」(“Dickens-worshipping [member]”)であったと言っているが(268)、その言説は必ずしも妥当ではなく、Morley は *Examiner* 紙の「フォースター崇拜のメンバー」であったと結論付けた方が良いのだ。

( 4 )

この章では Dickens の作家としての側面と Forster の伝記作家としての側面への Morley の評価を併せて検証する。

Dickens との接触が始まった頃の Morley の作家 Dickens への評価には揺れが窺われる。例えば Morley は *Household Words* 誌の第一号に掲載された、自らが Dickens 作と推測した “Valentine’s Day” を前述したように高く評価したものの、それ以外のものはつまらないと言っている。そのように言うことによって彼は作家としての Dickens を実は貶してもいた。と言うのはその号にはその物語風の論説以外に、もう 2 編（1 編は合作）の Dickens の筆になるものが匿名で掲載されていたからである。“The Amusements of the People” という随筆と “A Bundle of Emigrants’ Letters” という Caroline Chisholm との合作の論説である (*Household Words* 1: 13-15, 19-24)。<sup>8</sup>Dickens の作品への Morley のこの無意識の裡の批判は、無意識であるだけに彼の本音と捉えることも出来る。編集者としての Dickens への批判の根拠の一つとして彼が挙げた、Dickens には「しっかりとした文学的なセンス」が欠如しているという彼の考えは、作家としての Dickens への彼の無意識の裡の批判と無縁ではなかったように思われる。もっとも Solly に依れば、「文学的なセンス」が Dickens に欠如している旨を記した Morley の書簡には、Dickens は「人情味とウィット」(“heart and wit”)における天才を有しているので、将来は Henry Fielding に次ぐ地位を占めるだろうという彼の予測も記されていた (Solly 149)。

上述した時期 (1850 年) の Morley の Dickens への評価の揺れは、1881 年に出版された Morley の著作 *Of English Literature in the Reign of Victoria: With a Glance at the Past* にも少し窺われる。例えば Dickens への賞賛の文言と並置された、Dickens は歴史本を書くのに不可欠な多くの知識を持ち合わせていなかったという *A Child’s History of England* への評価、あるいは Dickens は時折「早い時期に獲得すべき教養」(“early culture”)の欠落を露呈することがあったという文言が、その少しの揺れを具現するものとなっている (373, 377-79)。

Lohrli は Morley の件の著作から上述したのと同じ要素を取り上げて、Morley は Dickens の作品が「俗悪だ」(“vulgar”)という一部の者達の誇りと、Dickens が「たまたまその時に問題になっていた事柄」(“accidental questions of the day”)を自分の小説の素材としたという批判に対しては抗弁したが、彼の Dickens への批判的姿勢は 30 年前と「基本的には変わらなかった」(“essentially unchanged”)と述べている (370-71)。

筆者が *Of English Literature in the Reign of Victoria* の当該部分を読んで受ける印象は、Lohrli の見解とは少し違う。つまり *Household Words* 誌と *All the Year Round* 誌のスタッフとして Dickens と長く付き合う機会を得、彼が後期の作品群を発表する姿を身近で目の当りにし、Forster の筆になる

Dickens 伝の第一巻（1872年発行）で Dickens の少年時代の苦悩を知った Morley は、Dickens の創作活動と人となりへのより深い理解を背景として、Dickens のための弁明を Lohrli の言う以上にしているのだ。論より証拠 Morley のその著作内での Dickens への評価には、彼との接触の第一段階における評価には窺われなかった、Dickens の少年時代の悲惨な体験の効用のことが言葉を尽して説明されている。少し長くなるが引用してみよう。

Dickens, with little aid of school education in his early years, and in much contact with the lower forms of life, had the energy of genius strengthened, and its sympathy deepened, by a youth of battle against adverse circumstance. . . . A vigour impatient of all check set itself face to face with the ills of life, and spent the gifts of a rare genius in strenuous service to humanity. . . . [B]rilliant playfulness of fancy in a man of genius, whose very defects of conventional training belonged to a childhood and youth brought into close contact and victorious struggle with the meaner life that was about him, and who drew from such education only a more vivid sense of social needs, and keener sympathies with those who are forced to fight the battle with less strength to overcome, cannot be vulgar. (377-78 Emphasis added)

上掲の引用文は 1881 年における Morley の Dickens への賞賛のレベルが、30 年程前の接触の第一段階におけるレベルよりも相対的に上昇したこと、そしてその賞賛の中身がより深みを増したことを明白に示唆している。

次に伝記作家としての Forster に対する Morley の評価を見てみよう。

Morley は 1850 年に恋人 Miss Sayer へ送った書簡で、Forster の *The Life and Adventures of Oliver Goldsmith* (1848 年発行) は「力強く男らしい英語」(“vigorous and manly English”) で執筆された「その類のものとして完璧なもの」(“perfection of its kind”) であり、著者が「賢くて、慈悲深くもあり思慮も深い」(“wise, charitable, thoughtful”) 人物であることが読み取れる作品だと賞賛している。また Morley は同じ書簡で、Forster が「寛大で、高潔な一流の人士」(“a first-rate man, generous and high-minded”) であると評価し、自分が鬼籍に入ることがあれば Forster のような伝記作家に自分の功罪余すところのない伝記を著してほしいものだ、という感慨を漏らしている (Solly 154)。

さらに本稿の序章で言及した Forster の Sir John Eliot 伝への 1864 年の書評でも、Morley は Forster がその伝記執筆のために「明晰な判断力と頭の回転の早さ」(“clear judgment and quick wit”) でもって資料を丹念に検討したこと、またそれ故にその伝記は不撓不屈の人であった Sir John Eliot の言動についての「詳細にして正確な記述」(“full and exact account”) となっていることを指摘した上で、このような業績は英国への「高遠な貢献」(“a high service”) となっていると結んでいる (*All the Year Round* 261: 253-58)。因に Morley が Forster に傾倒していることを承知していた Dickens は、Morley の書評がこのような内容になることを予期していた。そうでなければ、序章で述べた *Our Mutual Friend* に登場する Podsnap 像に我が姿を見出した時の Forster の怒りを事前に和らげようという、Dickens の計画が上手く運ばないからである。

Forster 没 (1876 年 2 月) 後に Morley が執筆した Forster についての 小伝 (*Handbook of the Dyce and Forster Collections in the South Kensington Museum* に収載された) の中でも、彼は Forster の筆になる他の人物伝を賞賛している。例えば 1869 年に上梓された Walter Savage Landor 伝は、事実関係を詳細に記述した、イギリス文学を学ぶ者にとって「極めて重要な鑑識眼のある示唆」(“critical suggestions of great value”) に富む作品であると彼は評価した。さらに彼は 1872 年から 1874 年にかけて刊行された Charles Dickens 伝は、「一つの視点、しかも考え得る最良の視点から捉えられた偽りのない [D の人生についての] 描写」(“a true picture [of Dickens's life] from one point of view, and that the best conceivable”) となっていると述べている (71)。これらの言葉からも察せられるように、伝記作家としての Forster への Morley の評価は終生変わることはなかった。

この章では Morley の言葉に窺われる日常生活レベルでの、彼の Dickens と Forster との心理的な距離を検証してみよう。

Morley は *Household Words* 誌のスタッフとなってから間もない頃の書簡で、「ディケンズは目下のところ少し距離を置いて僕を気に入ってくれている」(“Dickens at present likes me at a distance”) 程度だが、その裡に二人は「ぐらつくことのない友人」(“stout friends”) になるだろうと言っている (Solly 213)。実はこの書簡は前述した Morley 作の “The Good Side of Combination” を修正した Dickens に対して、「うるさい奴だ」(“bother him!”) と彼が内心で憤った 1851 年 10 月に近い時点のものである。この 2 通の書簡における彼の Dickens への姿勢には当時の、新しい環境に身を置いた彼の内心の複雑さと不安定さが顕現されている。

その後の Morley と Dickens との私生活における接触は Morley が Dickens 宅に招待されるという形で主に為されたが、Pilgrim 版の書簡集や Solly 著の Morley 伝で判断する限りその回数はそれ程多くない。1851 年 12 月 4 日に Dickens 家でのイブニング・パーティに招待された Morley は楽しい時を過ごし、Dickens の妻 Catherine は「皮肉っぽい」(“satirical”) 人物を好まないようだ、常々 Morley の執筆するものが「皮肉っぽい」ことを批判していた Miss Sayer に書簡で伝えている。Catherine の不興を買わないようにその場を取り繕った Morley は、Dickens 家の新年会への同月 27 日付の彼女からの招待状を獲得している。但し Morley は、件のイブニング・パーティの際に見学した Dickens の書斎は豪華で書物も相当に収蔵されていたが、「圧倒的な蔵書と言う程ではなかった」(“not an overwhelming stock of books”) という感想を残している (Solly 150, 200-01; *Letters* 6: 548&n; *Letters* 7: 905)。

Morley をイブニング・パーティへ招待したのは私的なレベルでの Dickens の Morley への気遣いを表す例となっているが、Dickens の気遣いは家族が増えていた頃の Morley の経済的困窮への支援という形で為されたり (*Letters* 7: 392n) Morley の家庭生活に関わる事柄を書簡でそれとなく触れたりするという形で為された。後者には 2 例がある。その一つは、避暑地 Folkstone に滞在していた Dickens から 1855 年 9 月 21 日付で Morley に送られた書簡である。その中で Dickens は、自分の滞在先の近くで Morley が 2 歳の長女 Violet と一緒にいるところを偶然見かけた人がいたのだが、自分が滞在している家に寄ってくれれば良かったのにと残念がっている (*Letters* 7: 706-07&n)。もう一つの例は Morley に関係する人のために必要なものなら何でも彼に送る用意があるという旨を記した、1862 年 3 月 31 日付の Morley 宛の書簡である (*Letters* 10: 61-62)。Dickens の書簡集に収載されている Morley 宛の書簡は仕事上のものが多く、このような言及がされているものは残念ながら数少ない。

Morley と Dickens との心理的な距離を測るもう一つの方法を Lohrli が指摘している。Lohrli に依れば、Morley は自分が上梓した本を Dickens に献呈する場合、“[his] respect” とか “hearty”、“sincere” とか “true” といった形式的な言葉を献辞の中で使用し続けたそうだ(370)。<sup>9</sup>このことはこれまで検証した彼等の私的レベルでの親密度の有り様と軌を一にしている。しかしながら Dickens が他界した時 Morley は、Dickens がいなければ自分の人生は今あるよりも幸福度が低かったかもしれないこと、互いへの好意を 19 年間持ち続けたため二人の間には不愉快な言葉が行き交ったことはなかったこと、そして Dickens の訃報に接して、彼への「敬意」(“regard”) が知らない裡に強くなっているのを知ったこと等を書簡に記している (Solly 278-79)。

それでは Morley と Forster との心理的な距離はどのようなものであったのであろうか。Morley は Forster と知り合って 1 年半程が過ぎた 1851 年 8 月付のある書簡で、自分と Forster との関係が既に Forster が彼の ことを「モーリイ君」(“my dear Morley”) と呼ぶ程のものになったと言っている (Solly 202)。編集者及び伝記作家としての Forster への Morley の評価から推察出来るように、Forster と自分には「似通った心性」(“like-mindedness”) があると感じていた Morley と (Solly 163)。

有望な若手のジャーナリストを育成することに熱心だった Forster との心理的な距離は (Morley, *Of English Literature* 385-386; Davies 87)、二人が知り合って間もなく急速に縮まったのだ。

Morley の Forster への信頼をより強め、彼らの距離をさらに縮めることとなったと思われる事柄が、前述した Morley の Forster へのオマージュでもあった Forster 小伝に記されている。それは Forster が Anne 女王の治世における歴史的側面と文学についての考察を本格的に始めた、1848 年頃の彼の書斎を以下のように描写する Morley の筆に窺われる。

His chambers were now walled with books. In a corner by one of the windows of his study, he was planted all day long, day after day, his massive head bent over his work. His features when in repose were cast, by the habitual labour and severity of purpose, into a fixed expression that might suggest severity of character to one who did not know the man. (67-68)

Morley と Forster との初対面は 1850 年 7 月のことであり Lincoln's Inn Fields 58 番地にあった、Forster の借家の 1848 年における内部の様子を Morley が知る由もなかった。上掲の引用文中の書斎での Forster の姿の描写は、初対面以後 Morley がその住居を訪問した際に何度も眼にした書斎での Forster の姿を基にした、あくまでも彼の想像の図である。自分自身読書家であった Morley はその住居の部屋々々の壁が書物の山で埋まっている光景を初めて見た時、随分と感銘を受けるとともに Forster と自分との共通性を改めて確信し、彼への信頼をより強めたものと思われる。

上掲の引用文の末尾に置かれた「[フォースター]を知らない人には厳格さを思わせる視線を固定した表情」(“a fixed expression that might suggest severity of character to one who did not know [Forster]”)というフレーズには、Morley ならではの Forster に対する見方が窺われる。これと軌を一にするのが Forster 小伝中の、Forster には「彼を知らない人々によって誤解されがちな外面的な物腰」(“an outside manner that might be misunderstood by strangers”)が見受けられたという Morley の言葉であり(54)、Forster には「彼を知らない人々をまごつかせ、彼の友人達を面白がらせた声高で尊大な物腰」(“a loud important manner that puzzled strangers and amused his friends”)という *Of English Literature* 中の言葉である(385)。Forster の「友人達」であった Dickens や William Charles Macready ですら辟易とすることもあった悪名高い彼の性格も(Macready, 74-75 [1840 年 8 月 20 日付]; 323 [1846 年 2 月 14 日付])、Morley の手に掛かるとこのような弁明の対象となるのだ。<sup>10</sup>

## (結び)

以上、Dickens とは 20 年間そして Forster とは 26 年間の付き合いのあった Morley の、その二人の公的及び私的な側面(結局その一部でしかなかったが)に対する評価を検証するとともに、彼等を見守る Morley 自身の像を垣間見た。

20 年間 Dickens に向けられた Morley の視線は最後迄その厳しさを完全に消滅させることはなかったが、Morley の人生はその行路の途中で彼との出会いがなければ随分とその様相を異にしていたことであろう。下世話なことを言えば前述したように Morley は、*Household Words* 誌のスタッフとなった頃には 550 ポンドもの借金で首まで浸かっていた訳で、たとえ Forster との出会いがあったとしても *Examiner* 紙からの報酬だけでは問題は解決されなかったであろう。それに Morley の才能は確かに Forster の指導によってその活動の領域を広げると同時に開花したのであるが、*Household Words* 誌と *All the Year Round* 誌へ頻りに寄稿する裡に鍛錬され、その両誌の編集者としての仕事をこなす裡に培ったジャーナリストとしての技術も、その才能の開花というものに寄与するところ大であったことは間違いない。

Dickens が鬼籍に入るのを見届けてから 22 年後、そして Forster が鬼籍に入ってから 18 年後に



Morley 自身も満 71 歳でその人生を終えるのだが、死の床に就いた時の Morley の胸中に去来したその二人の大物との若き日の活動の記憶は、満足感を与えるに足るものであったのではないであろうか。

(注)

Dickens の書簡集は Pilgrim 版を使用した。尚その書簡集は *Letters* とのみ表 記する。また『こころ』と表記した文献は拙著『ディケンズのこころ』を示す。

1. この段落に関わることは『こころ』152-65 参照。
2. この段落に関わることは Solly 1-144 参照。
3. この段落に関わることは Solly 149-54 参照。尚 Morley は *Household Words* 誌に 19 年間で 300 本以上もの記事（散文と韻文の）を掲載している。これは Anne Lohrli に依れば他のどの執筆者の仕事量をも凌駕し、Dickens と較べても *Household Words* 誌のページ数にして 300 ページ程多いようだ (371)。
4. Morley 作の “The King of the Hearth” (*Household Words* 誌の第 36 号 [1850 年 11 月 30 日発行] に掲載) の原稿の段階でのタイトルと物語の背景についての Dickens の助言は、作品を改良するものとして Morley は感謝している。Solly もこのようなケースは珍しいと述べている (168)。
5. Morley が *Household Words* 誌のスタッフとなってから 10 ヶ月程後の 1852 年 4 月 15 日に、彼と Miss Sayer は結婚している (Solly 218)。
6. 1858 年のある時期には、過去 2 ヶ月間の *Household Words* 誌のための僅かな仕事に支払われた報酬は、良心が咎める程に多大なものだったと Morley は謙遜して言っている (Solly 241)。
7. 本論で言及した Dickens による Morley への駄目出し以外にも、厳しい Dickens の言葉が直接・間接に彼に向けられている (*Letters* 6: 790-91 [1852 年 10 月 31 日付の Morley 宛の書簡]; *Letters* 7: 46-48 [1853 年 3 月 10 日付の W. H. Wills 宛の書簡]; 485 [1854 年 12 月 16 日付の W. H. Wills 宛の書簡])
8. その号に掲載された “A Preliminary Word” も Dickens の執筆したものであるが、ここでは考察の対象とはしない。
9. 遺憾ながら Morley が Forster への献辞でどのような言葉を使用したかということ、筆者は未だに確認していない。
10. 因に Morley の長男は Henry Forster Morley と名付けられている。Solly の Morley 伝には記されていないが、Forster が名付け親であったことは明白である。

#### 参考文献

- Davies, James A. “Forster and Dickens: The Making of Podsnap.” *Dickensian* 70 (1974): 145-58.
- Dickens, Charles, ed. *Household Words*. 479 vols. 1850-59. 東京: 本の友社, 1989.
- . *The Letters of Charles Dickens*. The Pilgrim Edition. Vol. 6. Oxford: Clarendon, 1988.
- Fitzgerald, Percy. *Memories of Charles Dickens*. Bristol: J. W. Arrowsmith, 1913.
- Kaplan, Fred. *Dickens: A Biography*. London: Hodder and Stoughton, 1988.
- Lohrli, Anne, Comp. *Household Words: A Weekly Journal (1850-1859) Conducted by Charles Dickens*. Toronto: U of Toronto P, 1973.
- Macready, William Charles. *The Diaries of William Charles Macready 1833-1851*. Vol. 2. Ed. William Toynbee. London: Chapman, 1912. 2 vols.
- Morley, Henry. “Biographical Sketch of Mr. Forster.” *Handbook of the Dyce and Forster Collections in the South Kensington Museum*. 53-73. London: Chapman, 1880.

- . *Early Papers and Some Recollections*. London: Routledge, 1891.
- . "How King Charles's Head Was Loosened." *All the Year Round* 23 April 1864: 253-58.
- . *Of the English Literature in the Reign of Victoria with a Glance at the Past*. Leipzig: Bernhard Tauchnitz, 1881.
- Oppenlander, Ella Ann. *Dickens' All the Year Round: Descriptive Index and Contributor List*. Troy, NY: Whitston, 1984.
- Solly, Henry Shaen. *The Life of Henry Morley, LL.D.* London: Edward Arnold, 1898.
- 山崎 勉 『ディケンズのこころ』東京：英宝社, 2003.